
仮想の女神

滝龍太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮想の女神

【Nコード】

N0854J

【作者名】

滝龍太郎

【あらすじ】

大学三年になった楠木義浩は、残りの二年間を一人で生活しようとして、アルバイトで貯めたお金で安アパートを借りる事にした。そのアパートの郵便ポストに、以前の住人宛なのか、一通の手紙が入っていた。

その中身は女性の字で、自殺の予告内容であった。消印の京都へ、楠木は出掛ける事にしたが……。

仮想の女神

滝 龍太郎

1

桜が満開となり、公園では日曜日ともなると花見の人で溢れていた。春は新入学、新入社のシーズンでもあり、行き交う人も、一様に、はつらつとして見える。

大学三年になる楠木義浩も、二年前には大学生という新しい生活に入り、新たな期待と夢を胸に、横浜桜木町から大学のある池袋に旅立ったのである。

二年間ですっかり大学生活に慣れ、大人としての自覚も出始め、残りの二年間を一人で生活することに決めた。

親への説得材料として、生活に対しての資金援助は一切貰わないと約束し、実生活の訓練ということで、ようやく許可を貰ったのが二日前の三月三十日であった。

アパートを探すには遅すぎる日付である。遅くても、二月から三月の始め頃までには探しておかないと、自分の条件に合った物などは到底探すことはできない。

学生の身、二年間のアルバイトで溜めたお金などたかが知れている。その範囲内で探すわけだから、二ランクも三ランクも落とさなければならぬ。まして、二十三区内である。

楠木は、大学のある池袋を起点に乗り換えなしで行ける場所を探した。もちろん、近いに越したことはないが、あまり近すぎても悪友の巣にされてしまうので、何駅か先に照準を絞った。当然、家賃の限度があるので若干の遠さはしかたがない。

まずは、池袋から準急なり急行で一駅目の、西武池袋線の練馬駅

及び東武東上線の成増駅周辺の不動産屋に当たった。当然、時期が時期だけに目ばしい物はなく、自分の考えていた期待はもろくも飛んで行ってしまった。予算的なものも、当然大きく左右されてはいるのだが。

楠木はランクをぎりぎりまで落とし、憧れていた期待は全て捨て、一軒の安アパートを決めた。そこは細い路地をくねくねと入り、南側は五階建のマンションが建っているため陽は遮られ、北側は汚いどぶ川の流れるところだった。ただ、アパート自体はそれほど古くはなく、六畳の和室に二畳ほどのキッチンの付いた、家賃の割にはまあまあのものであった。

この時期に空いていたということは、南側にマンションが建っているおかげで陽当たりが悪いからだ、その不動産屋が言った。ただ、成増駅の利用ではなく、その一つ手前の下赤塚駅利用ということを除けば、楠木とすればすこぶるご機嫌であった。

一つ手前の下赤塚駅は、準急も急行も止まらないのである。池袋から最初に止まるのが成増駅で、下赤塚駅にはそこから引き返さなければならぬ。それとも、池袋から各駅停車に乗って、七つの駅を止まって来なければならぬのである。

池袋から成増まで直通で行ってそこから上りの各駅停車で一つ戻ると、池袋から七つの駅を止まって来るのではどちらが早いのか、成増での上り電車の接続次第だが。どちらにしても少々面倒なのである。定期も成増まで買わなければいけない。引き返す芸当はご法度である。いずれにしても、楠木義浩は、破格の家賃のそのアパートに住むことになった。

昨日荷物を運び込み、と言っても、ふとんが一緒にテレビと机と小さな本箱が一つだけの荷物である。

コーポ第三という名のこのアパートは、一階が四室、二階も四室で、楠木はその一階の端の部屋、一〇一号室に居を構えた。構えるほど大袈裟ではないが、楠木としては、一国一城の主の構えであった。

早速、玄関ドアに、ワープロで打った楠木姓の紙を貼り、階段の所にある集合ポストにも、同じように名前を貼った。

（おやつ！）

昨日見た時、ポストの中は空だったのだが、何枚かのチラシと一通の封筒が入っていた。封筒は白の二重封筒で、一目で女性の字と分かる文字が書かれていた。

封筒の宛て名は、大河内重治と書かれていた。

（間違いだな）

楠木は裏を見た。そこには何も書かれていなかった。もう一度表を見て、宛て名を確かめた。

東京都板橋区赤塚九丁目三十二の五 コーポ第三 一〇一号室。

（間違いないな）

楠木は、集合ポストの名札を見た。部屋番号を間違えて書く場合があるからだ。しかし、集合ポストには大河内姓の名前はなく、一つだけ名前のないポストがあつたが、そこは二〇五号室で、四という数字は飛ばしてあつた。（二〇五を一〇一とは間違わないだろう）

楠木は、先住者に来た手紙ではないかと思った。女性の持つ、優しい字。でも、差出人の名前が書いていない。消印は京都の印が押されている。

（京都か。旅先からかな？）

京都の寺社の思い出を、旅先から愛しい人に寄せたに違いない。楠木は、その手紙と何枚かのチラシを持って自室に戻った。

2

たばこに火を点け、テレビのスイッチを入れた。三日間ほどアルバイトは休んでいる。アパートを決めたり、引っ越しをしたりで忙しかったのである。今日は、一日のんびりと、テレビでも見て過ごすつもりでいた。ぼんやりとテレビを見ていると、手紙という話題が出て来た。

それで、楠木は先ほどの手紙を思い出した。机の上に放り投げていた手紙を取り、色々と思案してみた。

京都の情景をしたためて旅先から投函したのか、それとも、京都に住んでいる彼女からのラブレターなのか。でも、彼女なら転居したことは分かっているはずである。それに、自分の名前は必ず書くはずだ。それが無いということは怪しいものがある。

楠木は、どうしたらいいものか思案し、不動産屋に連絡してみた。アパートの前が酒屋になっており、そこに公衆電話がある。わざわざ公衆電話にまで行って掛けなくてもいいのだろうけど、楠木の性格上そのままにして置くことができなかった。

不動産屋が言うには、前住者の大河内重治は、いきなり引き払うからと連絡があり、家賃を一カ月滞納していたので、保証人である兄に来て貰い明け渡してもらったとのことであった。大河内は会社も辞めてしまい、行方不明らしい。

「じゃ、郵便物はどうしますか？」

楠木が訴えるように聞いた。

「兄さんに連絡したところで、捨ててくれと言うに決まっていますよ」不動産屋はそう言ったが、楠木は勝手にそんなことはできないと言いはり、兄の連絡先を教えてもらった。

お節介かも知れないが、楠木は兄の家に連絡して郵便物のことを話した。

「重治は借金を作ってどこぞの女と行っちゃったんだ。連絡もないし、どこにいるか分からん。手紙？ おおかた借金の催促だろう、そんなもん捨てちまってくれ」

兄は怒りながら言った。相当いい加減なことをして、どこかに雲隠れしたらしい。

楠木は受話器を置いた。持ち主の身内から捨ててくれと言われたのだから、中を見てから捨ててもいいだろう。楠木は部屋に戻り、白い封筒を破った。中から白い便箋に書かれた、女の優しい字が目に見え込んで来た。

『重治さん、私は今京都にいます。・・・』

楠木の思っていたとおり、京都へ旅行に行った時の手紙である。

楠木は、彼女からの旅のメッセージと考えながら、先を読んだ。

『昔、あなたと一緒に行った京都のお寺を回っております。その中でも、特に印象に残っている嵯峨野の森を、二人で来たことを思い出しながら歩きました。森の中には・・・』

延々と、便箋五枚にびっしりと書いてある。

楠木は途中まで読んで馬鹿らしくなってきた。だれのものかも知らない恋文を、真剣になって読んでどうするんだ。

便箋を投げ出し、タバコに火を点けた。深く吸い、ゆっくりと肺の中から煙を吐き出した。続けて二度ほど同じように煙を吐き出すと、頭の中がくらくらした。

楠木は、ぼんやりと霞がかった眼で、再び便箋を手に取った。一時の休憩の間、馬鹿馬鹿しくなっていて途中で放り投げた手紙が、また新鮮なものに見えてきた。

『あなたと自転車を止め、そっと寄り添った木がまだあります。あの時の幸せを、この場所で永遠に包み込みたい。その木の下で、そっと死を迎えます』

「何！」

楠木はびっくりした。

(自殺の予告ではないか)

急いで先を読んだ。

『あなたのことは恨んでいません。』

ただ、もう少し私の方を向いていてほしかった。ただそれだけです。

一本の木の下で。

さようなら

あい ♪

あいと言う名の女性が、大河内重治と京都の嵯峨野でデートをしたその場所で、一人で自殺をするという予告の手紙であった。

(これは大変だ。どうしよう)

楠木は、大河内重治の行き先を知らない。実の兄に聞いても分からないし、不動産屋も知らない。勤め先も辞めていて分からない。探すにも探しようがない。手掛かりが丸つきりないのである。

今現実に分かっているのは、手紙の消印の日付、三月三十日には、あいと言う名の女性が、京都嵯峨野の郵便局にこの手紙を出したということである。そして、二日過ぎている。あいと言う名の女性が、そこで本当に自殺をしたのか、それとも、手紙が着いて、大河内重治がそれを読んで、嵯峨野に飛んで来るのを待っているのかも知れない。複雑な女心は、楠木には読めない。

さし当たり、三十日以後、嵯峨野で女性の自殺がないか調べることにした。自殺の記事となると、全国版には載らないと思い、近所にある区立図書館に行ってみた。

ところが、ここでは全国の新聞は取り寄せてないということだった。楠木は京都の新聞社に電話を掛け、三十、三十一日、そして、現在までに自殺の情報はるか聞いてみた。身内の人間が京都方面で失踪したということを前提にして聞いた。

「そういう事件なり事故は、この三日間何もないです」

新聞社からの言葉に、楠木はホッと胸を撫で下ろした。

（やはり、大河内が来るのを待っているんだ）

楠木は、あいと言う名の女性が可哀想になってきた。

三月三十日に投函して、二、三日後の四月一日か二日に届いたとして、大河内がそれを読んで飛んで来るには、早くても四月一日、遅くても三日には来ると思っているに違いない。

（よし、京都へ行ってみよう）

嵯峨野の森をさまよっている、あいと言う名の女性を助けに行こうと、楠木は立ち上がった。

（なんで、俺がこんなことをしなければいけないんだ）

楠木の心の中は、お節介な自分に腹が立った。この手紙を読んだ恋人なら、思い出の場所へすぐさま飛んで行くに違いない。そして、あいと言う名の恋人を探して思い止どまるように説得するであろう。普通ならばである。

ところが、大河内重治と言う男はどうしようもない男で、あいと言う名の女性を振り、他の女性と行方をくらましたらしい。仕事も身内も捨てて。

手紙の内容からは、大河内に対してそんな男とは思っていないのが可哀想である。また、そんな男の本性を知ったなら、何も思い出の場所へ行つてまで自殺する気にはならないだろう。

楠木は考えた。どちらにしろ、大河内と言う男が、この手紙を見ても京都には行かないだろう。だから、これは自分にくれた手紙なのだ。と、自分を動かす理由づけにしてしまった。

楠木は、下赤塚から池袋に出て、山手線で東京駅に行き、下り新大阪行きの新幹線に飛び乗り京都へ向かった。

車中、楠木は、あいと言う名の女性について、色々と想像してみた。

手紙の文面から察すると、二十歳からせいぜい二十五歳くらいではないか。そして、気立ての良いお嬢様タイプを想像しながら、楠木はウトウトと眠ってしまった。その浅い眠りの中で、あいと楠木が対面した。あいは、楠木の事を待っていたと告白し、楠木も、ようやく巡り会えたと手を握り、抱き締めた。そして、そんな中で、遠くで京都という言葉が聞こえて来た。

楠木はハッと目を開け、ホームに滑り込んでいる新幹線の窓から京都の文字を確認し、慌てて出口に向かった。

（あぶない、あぶない）

自分の勝手な邪推の中で、邪推のままの夢を見てしまったので、一人で勝手に照れてしまった。

腕時計を見ると、既に七時を回っていた。外は真っ暗である。し

かし、一刻を争う時なので、楠木は駅前からタクシーに乗り嵯峨野へ向かった。

楠木は行き先を嵯峨野と伝えたと、愛想の良いタクシーの運転手さんが京都の観光案内をしてくれた。楠木を観光旅行に来たと思っているらしい。

「どこの旅館ですか？」

運転手が、ルームミラーを覗きながら聞いて来た。

「いや、観光じゃないんだ。ただ、嵯峨野の森が見たくて」

と、楠木は目的を告げ、嵯峨野の森について詳しく聞いた。

「この時間では森を歩くのは危険です。明日の朝にした方がいいです」

人の良さそうな運転手は、楠木が森の中を歩きたいと言うと、危ないと制止してくれた。

「そうですか・・・」

楠木は残念がったが、ただ森を見に来ただけじゃないので、運転手さんに嵯峨野の森に一番近い旅館を教えて貰い、その前で降りして貰った。

楠木はタクシーの走り去るのを見て、旅館には入らず、嵯峨野の森に足を踏み入れた。

中は真っ暗で、細い道が続き、運転手が言った事はまんざら嘘ではないことが分かった。これでは人を探すどころか、迷ってしまつて自分も探して貰う羽目になりそうである。

とにかく真っ暗で、女性が一人で居られる所ではない。でも、自殺志願の人間ならそんな事は関係ないかも知れない。しかし、手紙の内容からすると、かなりのロマンチストと窺えたので、真っ暗な所での自殺は有り得ないのではないかと、楠木は思った。

きっと、朝もやの中で二人の思い出を胸に秘め、思い出の場所でお息を引き取るのではないかと、そんな光景を想像していた。

楠木はそう思い、旅館に引き返した。

翌日、楠木は五時に目を覚まし、嵯峨野の森に足を踏み入れた。朝もやの中、ぼうつと霞んだ木々が怪獣のように見える。

森の道が、奥に進んでいる。

（二人は、この道を自転車で来たんだな）

楠木は二人の足跡を確かめるべく、ゆっくりと歩いた。辺りは徐々に明るくなって来てはいるが、森が深いせいか陽のさす光は見当たらない。

三十分も歩いただろうか、額に汗が浮き出て来た。

（ちよつと休もう）

一服つけるために、楠木は切り株を探した。ゆっくりと進みながら辺りを見回したが切り株はなく、しかたなしにタバコをくわえて先を歩いた。

（思ひ出の木は一体どれだろう？）

あいと大河内との思ひ出の木は、その本人でないと到底分かつこない。まして、殆ど同じ木が連なっているのである。

道を逸れて藪の中に入ってみたが、特別目を引く木はなかった。

これといった特徴のある木もなかった。

楠木は藪から出て、元の道に戻った。しばらく行くと茶店があり、店の前に木の縁台があつて腰を降ろせるようになっていた。まだ時間が早いので茶店は開いてはいないが、楠木は首筋にも汗が出て来たので、ちよつと休むことにした。

（二人もこうやって休んだに違いない）

森に入り、ちよつと疲れた所に茶店があり、一服するには丁度良い場所である。

（そうだ、それだ）

自転車に乗り、額が汗ばんで来た所にほどよく茶店がある。二人はそこで自転車を降り、一服しながら将来の話などをしたのだから。そして、ふと寄り添いたくなり、側の木陰で抱き合ったのかも

知れない。

（そうだとすると、この茶店ではないな。今は歩いて来たが、自転車で来たとなると、汗ばむにはもうちょっと先だな）

先の道を見たが、森の奥で曲がっているのか、木が邪魔をしてあまり先までは見えない。

楠木は腕時計を見て、引き返すことにした。既に六時半になっており、七時の朝食に間に合わせないと、男一人の泊まり客を急に怪しまれても困るので、急いで引き返した。楠木は朝食を食べ終え、新聞に目を通した。地元版を隅から隅まで活字を追ったが、それらしいものは何もなかった。

あいという女性はまだ生きている。楠木はホッとした。もしかしたら、この旅館に泊まっているかも知れない。嵯峨野の森に一番近い旅館なので、その可能性は充分あった。

楠木は帳場へ行き、女性の一人旅がいるか聞いてみた。

京都では女性の一人旅はかなり多いらしい。特に、この時期はいつもより多く来るとのことだった。ただ、この旅館もそうだが、多くの旅館は敬遠しているそうである。

恋に破れて傷を癒しに来る女性が、一人旅の典型的なものらしい。その中でも意を決した人は少なくなく、京都の寺社を巡っていると、はかなくなつて来て自殺をする人が出て来るらしい。そんな人を見分けるのは難しいが、旅館としては、年齢、風体などから察知して断ることがあると言う。

楠木は、そういうものと納得して、旅館を後にした。

今朝歩いて気がついたのだが、レンタサイクルの店が結構ある。この嵯峨野の森を、自転車で走るというのである。かなりの距離だから当然といえば当然である。大河内と、あいの二人も、そのらのレンタサイクルで自転車を借りたに違いない。楠木も一台の自転車

を借り、過去の二人を追ってみた。

同じように自転車を借り、森の中へ入って行く人がかなりいる。そのほとんどは若い女性である。失恋を癒しに来たのか、それとも女性同士で旅を楽しんでいるのか、はた目には分からない。中には男性もたまに混っているが、あまり目立たない。

楠木はその流れと共に森の中へ入った。自転車で風を切ると、いくらか寒い感じがしたが、ペダルを踏み続けると、額に薄く汗が滲んで来た。今の季節が一番良い頃なんだろう。楠木は、ペダルを踏みながらそう思った。

大河内はともかく、あいという女性がペダルを踏み、少し汗ばんで来て一休みしたくなる場所はその辺りだろう。今朝来た茶店は、先ほど通り過ぎた。その先、道はカーブしていて途中幅が広がっている。そして、そこに何台かの自転車が止められていた。その脇に草むらがあり、四人の女性が座ってお喋りをしていた。（なるほど、ここが第一の休憩場所かも）

楠木はそこに自転車を止め、辺りを見回した。止めてある自転車の数と、草の上に座っている女性たちの数が一致しない。ふと、その先を見ると、細い一本の道が小高い丘の方に伸びていた。何人かはそっちの方に行っているようだ。

楠木は、草の上に座っている女性たちを一瞥すると、その細い道を上って行った。大河内とあいの二人は、この道を上って行ったのだろう。人がいるのを避け、二人きりになる場所を探すに違いない。そして、そこに思い出の木があるのだろう。

楠木は、自転車の数と草の上に座っている女性の数との差を、何げなく確かめてある。

道は細く曲がりくねっていた。少し行くと、アベックが手を繋いで降りて来た。二人は、楠木に不審な顔をしてすれ違った。これで主のいない自転車の数はあと三台である。

しばらく歩くと視界が開けて来て、広い平らな場所へ出た。そこは足首くらいまでの草が生えていて、疎らに太い木が何本か立って

いた。その外れの方に、女性の三人連れが、皆同じようなリュックを背負って歩いてた。これで自転車の数が一致した。でも、歩きで来ているのかも知れない。現に、歩きで森の中へ来ている者も何人か見かけた。

あいの存在が確かめられないまでも、思い出の木というものを探していれば、必ずあいという女性はやって来るに違いない。

楠木は太い何本かの木に顔を近づけ、何か印がないか調べてみた。

いくら思い出の木といっても、年月が経てばどれだか分からなくなるのは当たり前である。それには、二人で何らかの印をしたに違いないのである。そうでなければ、あいという女性がどこで待っているのか、大河内には分からないのである。

楠木は、この小高い丘に立っている全ての木を調べた。時間が経ち、調べ終わって時計を見ると十二時近かった。

（ここではないのかな）

楠木はぶつぶつ言いながら、小高い丘から細い道を降りた。自転車が溜まっていた場所には、すでに自転車は一台しかなかった。昼なので茶店にでも行ったのだらうと、楠木はそう思いながらペダルを踏んだ。

少し行くと、茶店が何軒か並んでおり、店の前に置かれた縁台には、何人かの若い女性たちが座っていた。だんごを口いっぱいほお張っていたり、うどんを美味しそうに食べていたり、様々に食事をとっていた。

楠木は、そんな光景を横目で見ながらペダルを踏んだ。

（とにかく、一刻も早くあいという女性を探さなくては）

お腹を空かすどころではなかった。

次の溜まり場にも自転車を止め、楠木は辺りの木を綿密に調べた。そして、それらしい女性がいなか見回した。時間が刻々と過ぎて行ってしまうので、楠木は焦って来た。今日は帰らなければいけない。学生の身で、アルバイトだけの稼ぎではそんなに泊まるこ

とはできない。

昼食もとらずに探したが、結局のところ、あいという女性はおるか、思い出の木も探すことができなかった。

楠木は、後ろ髪を引かれながら帰りの新幹線に乗った。

6

楠木は、勉強とアルバイトの日々を送っていた。例の手紙のことを警察に話そうかと思ったが、いたずらにすぎないと一笑されるのがおちと思い、届け出なかった。友人にも同じことが言えたので、今回のことはだれにも話してはいない。

あれから三日が過ぎたが、新聞にもテレビのニュースにもそれらしいことが出ないので安心はしている。あいという女性は、単なる嫌がらせで大河内に手紙を出したのかも知れない。楠木はなんとなくそんな気持になって来た。

（わざわざ嵯峨野まで行って、どうにかしてたな）

楠木は、自分の思い過ぎに苦笑いした。

学生の本分を忘れないようにしっかりと勉強し、親との約束を守るため、アルバイトもそうそうはさばれない。まして、虎の子のお金を、先日の京都市で殆ど使ってしまったのである。そんな本来の姿に戻った時、アルバイト先に刑事の訪問を受けた。

「楠木義浩さんですね」

きつい目のその男は、背広の内ポケットから警察手帳を出して、楠木に見せた。

「はい、そうですか」

「京都署捜査一課の吉井です。こちらは熊野刑事」

連れの男はニコリともせず、楠木を見つめた。

「京都？」

楠木は京都という言葉に一瞬ドキリとした。吉井刑事は、楠木の顔色の変化を見逃さなかった。

「嵯峨野をご存じですね？」

吉井が、すかさず突っ込んで来た。

「ええ、知っています。何かあったのですか？」

楠木は、例の女性の遺体が出たのかと思った。

「今日我々が来たのは参考までに聞きに来たのではなく、あなたに事実関係を聞きに来たのです」

吉井は、断定した言い方をした。

「はい」

楠木は事実を把握したいので刑事に従った。

楠木は外出の時間を貰い、二人を近くの喫茶店に案内した。椅子に腰掛け、ウェイトレスに注文を言い終えると、すかさず吉井が切り出して来た。

「まず事実を確認したいのですが、四月一日に京都へ行ってますね」

「はい、行きました」

楠木は早く本題を聞きたくて素直に答えた。

「嵯峨野のA旅館に泊まって、翌二日には、嵯峨野の森へ自転車で行きましたね」

吉井が手帳を目で追いながら、チラチラと楠木を見ながら言った。熊野は始終黙っていて、楠木の目を睨んでいる。

「はい、行きました」

「何の用で行ったのですか？」

「ちよっと、人を探しに」

「嵯峨野の森にですか？」

黙っていた熊野が聞いて来た。

「そうです。あの森の中で、ある女性を探していたのです」

楠木は事実を言った。

「その人はあなたの恋人ですか？」

吉井が聞いた。

「いや、違います。けど……」

楠木は、何と言っていいのか迷った。

「恋人でない人を、わざわざ嵯峨野まで探しに行ったのですか？」

「ええ、わけがありません」

「わけが？」

熊野が、ちよつと強い口調で言った。

「一体何があつたのですか？ 私に何を聞きたいのですか？」

熊野の強い言葉で、楠木は思つていたことを聞き返した。

「では、言しましょう」

吉井が、厳しい顔で楠木を睨んだ。

そこへ、ウェイトレスが注文したコーヒーを運んで来たので、話は一時中断した。

7

吉井刑事が、声を落として喋った。

「今朝五時過ぎ、嵯峨野の森の中で若い女性の絞殺体が発見されたのです。死亡推定時刻は四月一日午後十時から翌二日午前十時の間です。あなたが京都へ行った日と一致する」

「絞殺体？」

楠木が不審な顔をした。

「そうだ」

吉井は語尾を強くした。

「それが俺とどういう関係が？」

「いや、どういう関係か知りたいのは我々の方です。あなたが、嵯峨野の森を四月二日の早朝に歩いていたことは知っているのです。そして、その後、もう一度嵯峨野へ行っている。一体何しに行ったのですか？」

吉井が、容疑者を見る目付きで聞いた。

「だからさっき言ったように、人を探しに行ったのです」

「それは若い女性ですね」

熊野が断定するように言った。

「だと思いません」

「うん？ だと思いつてのは何だね」

「歳は分らないのです。ただ若い女性であることは確かだと思います」

楠木は何かを探るように言った。

「それはどういうことですか？ 現にあなたは嵯峨野まで、その人を探しに行ったのでしょうか？ それがよく分らないとはどういうことですか」

熊野が力ツカして来た。

「あなたは京都の嵯峨野まで、わざわざ人を探しに行ったのです。その人物がだれだか分からないで探せるのですか？」

吉井が冷静に聞いて来た。

「ええ、ですから探せないで帰って来たのです」

「どうも良く分らん」

吉井は手帳を開き、楠木の行動を確認した。

「もう一度聞きますが、あなたは、ある女性を探しに嵯峨野に行つたわけですね」

「はい」

楠木は冷静に言った。そして、吉井は静かな口調で喋った。

「四月一日の夜に嵯峨野のA旅館に着き、翌二日の早朝、嵯峨野の森の中を散策した。そして旅館に戻り朝食をとった後、再び嵯峨野の森へ。今度は、自転車を借りて入って行った」

「ええ」

楠木はびっくりした。今朝、遺体が発見され、すぐに動いたからといって、嵯峨野の森に行ったことまで調べ、京都から東京へ来てもう自分の所まで来たことに驚いていた。

そんな楠木の気持を察したのか、吉井が言った。

「宿泊名簿に、男の一人旅と、一日に二回も同じ人物が、しかも一人で嵯峨野の森へ入って行けば、おかしいとだれもが思うでしょう」
「そして、女性が殺されていたとなれば、疑われてもしかたがない

ですね」

楠木は、ゆうに構えている。

「まして、あなたの言うことはあやふやだ」

「そんなことはありませんよ。ただ、その女性のことは何も知らないのです」

「何も知らないでなぜ探しに行ったのですか？ それも嵯峨野へ」

吉井が核心に触れた。

「それは一通の手紙のためです」

楠木は、あいという女性からの手紙の件を話した。

「そんな馬鹿な。そんなことでいちいち京都まで行くか？」

熊野が呆れた。

「ええ。あの時は無我夢中で、早く行ってやらなければ自殺されてしまふと思って、何も考えずにすっ飛んで行きました。でも、帰って来てから、何を馬鹿なことをしてるのだろうと思いました……でも……その女性は確かに居たのですね」

「ええ、居ました。でも自殺ではなくて殺されていたのです」

吉井の言葉に、楠木が唸った。

「その殺されていた女性が、俺の探していた女性と同じ人物なんですか？」

楠木が、吉井に問いかけた。

「それはどうだか分からないが、死亡推定時刻に、あなたはその現場に居たことは事実なのです」

「ちょ、ちよつと待って下さい。それじゃ、俺が殺したみたいじゃないですか」

楠木が狼狽した。

「そうとはまだ言っていないが、今のところ、あなたが一番の重要人物でして」

「そんな」

楠木が唇を噛んだ。

「とにかく、手紙を見て下さい」

楠木はアパートに帰り、同行の吉井と熊野に手紙を渡した。そして、必死に事の成り行きを正直に話した。このアパートの先住者のこと、そして、その兄から聞いたことなども話し、解放されたのは夜の十時を過ぎていた。吉井刑事から聞いた話では、遺体があった場所は、なんと、楠木が最初に自転車を降りて細い道を上った、小高い丘の上であつた。一本の木の根元近くの草むらから発見されたのであつた。遺体には草がかけてあり、人目にはつかなくしてあつたという。

8

吉井は、楠木から借りた手紙から指紋を取り、殺された女性と一致するか京都署に送った。吉井は、警視庁に協力を要請し、大河内重治の行方を追うことにした。そして、嵯峨野で殺された若い女性の身元の割り出しを、京都だけでなく、東京にも焦点を絞った。

楠木は、一通の手紙からとんでもない事態に陥ったことに、自分の行動を悔やんだ。殺されていた人が、あの、あいという女性でないことを祈るしかなかった。でも、一つ引掛かっていることがある。あの小高い丘の上の、一本の木の根元というのが分からない。いくら草をかけてあつても、あそこにある全部の木を、一本一本丁寧に調べたわけである。足元に異変があれば気が付くはずである。

楠木はもう一度、嵯峨野のあの小高い丘へ行ってみようと思った。しかし、今は警察から、学校とアルバイト先以外には行かないでくれと言われている。いつでも連絡のとれるところに居なければいけない。考えてみれば旅費もないし、楠木は警察からの連絡を待つことにした。

京都署から、手紙に書いていた指紋と、殺された女性の指紋が一致したと連絡があつた。ということは、殺された女性は少なからず、あいという名の女性であり、東京に住んでいて、大河内重治の恋人であつた可能性が高い。吉井は、大河内を探し歩いている熊

野と合流した。

「相当な遊び人ですよ」

熊野が、大河内の友人から聞いたことを話した。

「酒は飲まないそうですが、女にだらしなく、ギャンブルきちがいです」

「そうか。この辺で近い所は？」

吉井が地図を広げて、熊野に聞いた。

「この辺は多いんです。戸田ボートに川口オート、それに浦和競馬大宮競輪……」

「なんだ、全部あるのか」

吉井はびっくりした。

「ええ、この辺は凄いです。まだ他にも……」

「そうか。それで大河内の好きなものは？」

「それが馬以外は全部です」

「何！ 馬以外は全部だと！」

吉井があきれた。

「そうなんです。人のやるものは全部好きで、一年中どこかへ行ってやってるみたいです。そこで、今日は戸田ボートが最終戦です。間違いなく行ってると思うのですが」

「なるほどな」

大河内の写真を携帯し、二人は大河内を探しに戸田ボート場に行った。最終戦のせいか、場内は大変混雑していた。吉井と熊野は二手に分かれ、大混雑の場内を探すことにした。

しょっちゅう来ているなら仲間が居るはずだと、吉井はたむろしている人たちに、大河内の写真を見せて聞いた。皆、怪訝な顔をして吉井を見たが、吉井の素性を聞く者はいなかった。おそらく、刑事だと思っているに違いない。

吉井が何人目か当たった時、大河内とボート仲間の人に話を聞くことができた。

「今日は来ていますか？」

「いや、見てないな。大河内の奴、今回は初日から来てないんで、どうしたのか皆と話してたとこなんだが」

「一回もですか？」

「ああ。こんなことは初めてだな。てつきり今日は来てると思ったが」

「今までにこんなことはなかったのですか」

「奴にしちゃ、初めてだな」

その仲間は断定した。

「他の所へ行つてるとか？」

熊野が聞いた。

「いや、他へ行つてたとしても、開催中一度は来るはずだが」

「用ができたとか、仕事が入ったとかはないのですか？」

「そんなことは聞いてないな。そうとしても一回は必ず来てたけどな」

「そうですか。ところで、大河内さんはいつも一人で？」

「たいがいそうだけど、たまに女の人と一緒にだったな」

吉井は、あいという女性じゃないかとピンと来た。背丈や顔つき、特徴などを聞くと、あいという女性そっくりだった。

「……で、どこに住んでいるか、聞いたことはありませんか？」

「確か、成増だと聞いたことがある」

「そこは引越して居ないのですが、その後は？」

「いや、聞いてないな」

「そうですか……」

吉井は丁重に挨拶して、他にたむろしている何人かに、同じことを聞き回った。

数日後、大河内重治の行方は依然掴めないが、嵯峨野で殺された、あいという名の女性の身元が割れた。

埼玉県警からの照会で、埼玉県和光市の会社員、西岡文治さんの長女、まき子さんと分かった。三月三十日に、京都へ旅行に行ったり帰り帰って来ないので、和光署に捜索願を出していた。そして、京都嵯峨野の女性殺人事件を東京まで広げた結果、殺された人物に似ていたところから両親が京都に駆けつけ、持ち物や殺された時の写真などで、西岡まき子であることが判明した。

「四月五日に帰って来るはずなのに、六日になっても何の音沙汰もないので、警察に行ったらしいです」

和光署から帰って来た熊野が、吉井に報告した。

「なんでも卒業旅行ということで、三十日の朝一人で行ったそうです」

「手紙の消印は三十日だから、家で書いたか電車の中で書いたかな」

「そうだと思います」

「西岡まき子は、卒業旅行を兼ねて傷心旅行に出掛けたわけだ。そして、自殺をほのめかして、元恋人の大河内に手紙を出した」

吉井が仮説を立てた。

「思い出の、嵯峨野の木へ、大河内が来てくれることを祈りながら行った。その現場には着いたその日に行って、次の日もその次の日も行ったに違いない。そして、そのいずれかの日に殺された」

「大河内の仕業ですかね」

熊野が聞いて来た。

「分かん」

吉井が首を振った。

「でも、西岡まき子と、あいという言葉は繋がりがありませんね」
熊野が疑問に思っていたことを口にした。

「それは、西岡まき子のニックネームかも知れんぞ。愛らしく、可愛いのであйтとか・・・」

「そういうことはありますね。事実、西岡まき子と手紙に着いていた指紋が一致したのですからね」

熊野がそう言うと、吉井は確信したように頷いた。

一方、大河内重治と西岡まき子との関係を調べていた刑事は、二人の繋がりが丸つきり出て来ないので不審に思った。楠木義浩と西岡まき子についても同じことであった。

吉井はそのことを伝えられ、思案にくれた。

「この手紙を、西岡まき子の両親に見て貰ってください」

吉井は疑念を持ち、熊野に指図した。

京都に行っているまき子の両親に、手紙の照会を求めた。両親は、京都署で真相の究明に協力をしている。

しばらくして、京都署から連絡があった。

「熊野刑事、この手紙は、まき子さんではないです」

それを聞いた吉井は、

「やはり」

と言い、腕組みをした。

「どういうことですか？」

熊野が、不安な顔をして聞いて来た。

「この手紙を書いた、あいという女性はまき子ではなく、偶然あの場所に居合わせたまき子を身代わりにしただけだ……。いや、違うな。あいに似たまき子を、京都のどこかで探して来て、あいの代わりに殺した。そして、あいの手紙にまき子の指紋を着け、大河内宛に投函した」

「あいの代わりにまき子を殺す。当然、手紙の内容からして大河内が一番怪しくなりますよね。なぜそんなことをしたのでしょうか？」

「ちよつと待てよ」

吉井が何かを掴んだ。

「あいの身代わりにまき子を殺すということは、その時点では何の意味も持たない。あの手紙があるからこそ、身代わりの意味があるってもんだ。あの手紙を、楠木が公表しなければ、身代わりに殺した意味が何もないじゃないか」

「ほんとですね。嵯峨野でまき子が殺されていた。旅行の途中で変

質者が通り魔的なものに殺された。ただそれだけで終わってしまう危険がありますね」

「犯人は、あいという女性が死んで利益を得る人間だ。そして、それを公表してくれる手紙の存在。その手紙を、大河内が受け取ってもしかたがないのだ。その後に入る、楠木でなければ……」

吉井はそう言うておきながら、しばし考えた。

「でも、大河内が受け取る場合も考えられますね」

「いや、それはない。この手紙が出されたことは、大河内が知ってはまずいのだ。あのアパートに、次に入って来る人物が読んで警察に届ける。そして、警察は地元の京都府警に連絡して現場を搜索する。すると、そこに手紙を出した人物が殺されている。その人物は、手紙の指紋と一致するから、その女性は、あいということになる」

吉井が、自分の推理を頭に描きながら話した。

「いずれは、西岡まき子という第三者であることが分かってしまうだろうが、それまでは、あいという女性が死んでいなければ都合が悪いのだ」

「やはりそこですね。そこに何かがあるわけですね」

「西岡まき子は身代わりの人物。楠木はだしに使われた人物。そう見れば、犯人の意図がだんだん読めて来る」

吉井はタバコを一本取り出し、おもいつきり吸った。

「あいの身代わり、西岡まき子の死亡推定時刻は四月一日の夜十時から二日の朝十時だ。発見されたのが四月五日の朝だ。少なくとも一日の夜から五日の朝までは、あいという女性は行方不明ということだ」

「その間に居ては困るわけですね」

「そうだ、その通りだ。その間に何かが行われたに違いない」

吉井は、そう判断した。

吉井と熊野は、東京での捜査を終え、京都署に戻った。

京都に向かう新幹線の中で、吉井が熊野に言った。

「君は大河内が犯人だと思うかね？」

「いや、違うと思います。手紙はわざと公表されるように意図的にされたわけですから、わざわざ大河内の名前を出すことは変です」

「ああ」

吉井は、熊野も同じことを考えているなと思った。

「犯人は？」

吉井が聞いた。

「あいと大河内と、共通な結び付きのある人物」

熊野はそう言って、窓の外を見た。

「そこだな」

吉井が頷いた。

京都署に着いた吉井と熊野は、早速、嵯峨野殺人事件の捜査会議に加わった。吉井は、帰りの新幹線で熊野と話したことを言った。

「ここに四月六日付の朝刊があります。京都版です。私が、四月五日に東京で、嵯峨野へ来た不審人物と会って、その手紙を京都署に送った翌日の新聞です」

吉井が熊野の顔を見て、ニヤツと笑った。

「この新聞によりますと、嵯峨野で殺された女性は自殺志願者で、あいという名前、と書かれています」

部長は、黙って吉井の言葉に耳を傾けていた。

「なぜ、ここまで複雑にしなければいけなかったか……」

吉井が皆の顔を見た。

「四月の六日前後に、あいという女性が死んだということを世間に知らせたかったのです。その後に身元が割れても、それはもう終わった後だからそんなのは構わないのです。ようするに、その時点で死んでさえいいいいわけです。つまり、何かの合図で、何らかの取引が行われたと思います」

部長が吉井の顔を見た。

「麻薬か？」

「だと思えます」

吉井の言葉に、部長が麻薬系の刑事を呼んだ。

「最近の動きは？」

「七日に大きな取引があったらしいのですが、はっきりとは掴めていません」

麻薬系の刑事は、困惑した顔をした。

「そうか、七日か……。それは地元の奴か？」

「いえ、東京の売人らしいのです」

「東京から京都へか」

部長が腕組みをした。

「ところで、あいという名の女性を知らんか？」

「あい？ さあ、聞いたことはないですね」

「そうか。昔のリストの中にも、そんな名前はなかったかね」

部長がしつこく聞いた。

「ええ、調べてみますけど。私の記憶の中ではないですね。その女性が何か？」

「おそらく……。あいという名の女性が死んだということが、何らかの暗号になっていて、それを合図に取引を成立させる。いいか……」

と言つて、部長が黒板に向かった。

「東京の売人が京都へ密かに来て……」

部長が、黒板に売人と書き、矢印で京都に繋いだ。

「取引の場所と時間は決めておき、日付だけはある合図が来るまでスタンバイ状態にしておく。そして、あいという名の女性が嵯峨野で殺されたことを新聞で確かめ、それが合図で取引を実行する」

「そうなのです」

吉井が立ち上がった。

「その、あいという名は、人ではなくてただの言葉なのです。あいという女性も居ようが居まいがそんなのはどうでもいいのです。た

だの合図の言葉だったのです」

吉井が、興奮して言った。

「となると、手紙の受取人である大河内との関係は？」

他の刑事が質問して来た。

「大河内はただのチンピラで、その手紙を出した人物と多少の面識があっただけだと思う。そして、大河内が引越したことを知ってる人物。そいつが犯人です」

吉井が断言した。

京都署は、大河内が危ないと、全国指名手配をした。

11

楠木は、警察から解放されているにもかかわらず、資金が底をついているため京都に行くことができなかった。あの思い出の木の下に、西岡まき子の遺体があったとはどう考えても納得がいかないのである。

そんなある日、交番の前を通りかかった時、楠木は足を止めて一枚のポスターに見射ってしまった。

京都嵯峨野女性殺人事件の重要人物と書いてあり、顔写真の下に、大河内重治と書いてあった。

（大河内が犯人なのか？）

楠木は、疑心暗鬼で大河内の顔写真を見た。

（大河内は何も知らないわけなのに）

警察が大河内を探しているのには、何か理由があると楠木は思っている。

そこで、楠木は大河内の兄に電話を入れてみた。

「前に、大河内重治さんに来た手紙のことで電話した者ですが・・・」

兄は覚えていてくれた。

「その後、連絡はないですか？」

「丸つきりだね。警察も探しているみたいだが、困った奴だ」

兄は、他人事のように言った。

「指名手配されていますが」

「ああ。何をやったのか知らないが。……ただ、あいつは人を殺すなんてことはできない奴だから……。どちらにしろ、俺には関係ないことだ」

「そうですか」

相変わらず兄の態度が厳しいので、楠木は次の言葉が出なかった。

「それはそうと、あんたは、重治の後に越して来た人だったな」

「ええ」

「二、三日前も電話をくれたかい？」

「いいえ」

「だったらだれかな？」

「他にも、重治さんの居所を聞きに来た人がいるのですか？」

「ああ」

その人物は、兄の居ない留守に電話があり、奥さんに、かなりしつこく重治のことを聞いたらしい。

警察以外に探してる人物とは？ 当然、嵯峨野の殺人事件に関係のある人物だろうと楠木は思った。

たった一通の名も知らぬ手紙から京都へ行き、そして、自分も事件に巻き込まれてしまい、楠木は事の真相をどうしても知りたかった。まして、大河内重治が指名手配となった今、居ても立ってもいられなかった。

楠木は、思い切ってアルバイト先に行き、前借りを頼んで京都に向かった。

一方、京都署の吉井と熊野は、全国から寄せられる大河内重治の通報の応対に大わらわだった。それは、北海道の片田舎の派出所からとか、九州の端の派出所からだとか、はたまた、一般の人からの通報も来たりしていた。しかし、どれも信憑性はなく、二人の出番にはまだ至っていない。

そんな折、大阪のキタの派出所に、大河内重治本人が出頭して来た。

大河内は何げなく派出所の前を通りかかり、指名手配の顔写真に一瞬目が止まり、自分の顔があるのにびっくりして出頭したのである。吉井と熊野はすつ飛んで大阪へ向かった。すでに大河内は大阪キタ署に移送されており、自分は何もしていないと騒ぎたてていた。

「あなたを指名手配したのは人権的に問題があったかも知れませんが、身の危険を優先すればしかたがなかったことなのです」

吉井が静かに言った。

「身の危険？」

大河内は、ふて腐れた顔をして聞いた。

「そう。あなたの危険な友人からね」

「なに！」

大河内は身に覚えがあるのか、一瞬顔をこわばらせた。

「何かご存じですね」

吉井が聞いたが、大河内は黙っている。

「あなたの身が危ないですよ」

大河内は腕組みをして、何かを考えるふりをした。

「叩けばほこりの出る体だろうけど、今はそんなことは問題にしている……」

吉井が大河内に近づき、

「正直に答えてほしい」

と言って、例の手紙を取り出した。

「これは、板橋のアパートに君が居なくなってから来た手紙だ。読んでみる」

大河内は手紙を手に取り読み出した。途中、何だこれと言いなから終わりまで読んだ。

「何なんだ、この手紙は？」

大河内は慚然とした。

「我々が言いたい言葉だ。その、あいという女性は彼女かね？」

吉井が、大河内の反応を見た。

「知らねえ。こんな女、俺は知らねえよ」

大河内は真顔とも取れる顔で吉井に訴えた。

「ほんとに知らないんだな」

「ああ、知らねえよ。あいななんていう名の女、聞いたこともねえ。第一、俺はこんなにもてやしねえ」

大河内の言ってることは本当にとれた。

「君は、板橋のアパートをいつ引き払ったのかね？」

「三月二十五日だが」

「ほう、よく正確に覚えているね」

「ああ、その日からこっちに来てるからね」

「なるほど。こっちに来たわけは？」

吉井は、じわじわと詰めて行つた。

「ダチが、いい仕事あつから引き払つて来いと言つから来たんだけど、居なくなつちまつたんだ」

「居なくなつた？」

「ああ、来た次の日に、どっか行つちまつたんだ」

「それで？」

「アパートは引き払つちまつたし、帰るところがないから昔の仲間頼つて……」

「それで、今はそこに居るのか？」

「ああ」

大河内はしよげかえっている。

「なんでアパートを引き払つてまで来たんだ？」

吉井が核心に触れた。

「家賃を溜めてたんで、三月二十五日に大家に電話して、もう帰らないから荷物を処分してくれって頼んだんだ」

「わざわざか？」

吉井は不審に思つた。

「ああ、一カ月溜めてるし、それ以上溜めると厄介だし、そのダチが電話しろ電話しろとうるさいので……」

「やはり」

大河内が自分から進んで電話をする人間じゃないなと思っていたので、吉井は合点がいった。

「それが、確かに三月二十五日なんだな」

「そうだ」

大河内は怒ったように言った。

「それで、そのダチというのはだれだね？」

「知らない」

「何！ 知らない。そんなわけがないだろう。アパートを引き払って大阪まで来たのにだれだか知らないなんて、そんな馬鹿なことがあるか！」

熊野が大声を出した。

「そんなこと言っても戸田で知り合っただけなんだ。羽振りが良かったもんでつい来ちゃったんだが……」

大河内は、身振り手振りをして真顔で言った。

結局のところ、その人物はどのだれだか丸つきり分からなかった。『いしさん』と呼ばれていたその人物は五十歳くらいで、大河内は、人相風体を詳しく覚えていて、捜査に進んで協力してくれた。

12

京都に着いた楠木は、早速、嵯峨野のあの木へ直行した。

前に泊まった旅館の前を通り、レンタサイクルの店の前でタクシーを降り、そこで自転車を借りた。楠木は、あの小高い丘をめざし、自転車のスピードを上げた。春休みも終わり、嵯峨野は人が少なかった。

丘の上り口に来た。そこには一台の自転車もなく、辺りはシーンと静まりかえっていた。楠木は自転車を降り、小高い丘を上った。

丘の上にも人影はなかった。

楠木は、何本かの木を見回した。すると、左から三本目の木の根元に、花束が置いてあるのが見えた。

（あそこだな）

その木のそばへ行き、木の根元を見回した。

（確かに、この木も調べたはずだ。この回りも）

楠木は首を傾げながら、木の回りを歩いた。

人の踏み付けた後がいつぱいあり、前に来た時とは様子が変わっていたが、自分の記憶は確かだと、何度も頭を傾げた。

あの時、死体に草が掛けてあったとしても気が付くはずだ。

（殺されたのはあの日かも知れないが、ここへ隠したのは、俺が見た後に違うない）

楠木はそう確信した。

一通り、前に来た時と同じように全部の木を見て回り、小高い丘を降りた。

降りると、人相の良くない男が自転車のそばに居た。

「あんた、大河内のダチか？」

と、鋭い目をして聞いて来た。

「いや？」

楠木は否定したが、大河内の名前が出たのでそれとなく聞いてみた。

「今、大河内って言った？」

「知ってるのか？」

その男は、更に鋭い目をした。

「いや、知らないけど。俺も大河内って人を探しているんだ」

「何！」

その男は、楠木を足元から上へジロリと見て、

「刑事か？」

と、聞いて来た。

「違う。あんたは？」

楠木が聞き返した。

「そんなのどうでもいい。それより、何で大河内を探しているんだ」
その男が、ドスの利いた声で言った。

「ちよつとわけがあつて」

楠木はそう言つて、自転車に跨がろうとした。

「ちよつと待て！ わけを教えろ」

その男が楠木の行く手を遮った。

「そんなことはどうでもいいでしょう。さあ、どいて下さい」

楠木がそう言った時、背後からバイクの音がして、二台のバイクが現れた。

「楠木君じゃないか！」

京都署の吉井刑事が、バイクを降りるなり、びっくりして言った。

「先日はどうも」

楠木はペコリと頭を下げた。

「そちらは？」

目の鋭い異様な人物を、吉井は不審に思った。

「なんか、大河内さんを探してるみたいですけど」

「何！」

吉井がその男を睨んだ。刑事の目でなくても、その筋の男とすぐ分かる。

「大河内の知り合いか？」

「刑事か？」

「ああ、京都署の吉井だ。大河内を探してるって本当か？」

「・・・」

「黙っていちゃ分からない。何とか言つたらどうなんだ」

「俺は知らない」

「何をだ」

吉井が更に睨んだ。

「何のことか何も知らない」

その男は、しらばつくれた。

「そうか。分かった。大河内に関係のある者は皆しよつぴく」

吉井はそう言つて、一緒に来た熊野に合図した。熊野は無線を取り、応援を頼んだ。

その男はパトカーに乗せられ、京都署に連れて行かれた。

楠木も吉井と一緒に京都署へ行つた。その行く途中、大河内が大阪に居ることを聞かされた。

13

その男は、大阪に根城を持つA暴力団の組員だつた。

「なぜ、お前が大河内を探しているんだ？」

A暴力団に詳しい刑事に、室井というその男は問い詰められた。

室井は下を向き、黙つたままだつた。

「黙つててもしょうがないんだよ。あーっ！」

その刑事は、どちらが暴力団なのか分からない口を利き、室井の顔にタバコの煙りを吐きかけた。

「だれに頼まれたんだ？ 石井か？」

そばに居た吉井がハツとした。

「石井というのはこいつのダチですか？」

「ええ。こいつの兄貴分でして、シャブ中のギャンブルきちがいです」

「歳は？」

「五十くらいです。それが何か？」

ちよつと来てくれと言つて、吉井が、その刑事を取調室から出した。

石井の人相風体を聞き、そして、『いしさん』と呼ばれていることを聞き出した。

吉井は、石井の写真を手に入れ、大河内を呼んだ。

「この男です！ 全く飛んでもねえやろうだ」

大河内が取調室の机を叩いた。よつぽど頭に来ていると見える。

「間違いないな。お前を大阪に呼んだ奴だな」

吉井が念を押した。

「ああ、忘れるわけがない」

大河内は懺然としている。

吉井が大河内の顔を凝視した。

「君に会わせたい人がいる」

「ん？」

大河内が吉井の顔を見た。

「ちよつと待っててくれ」

吉井はそう言つて取調室を出た。

その時、マジックミラーの外では、石井の写真を見て大河内が念を押したのを確認すると、何人かの刑事が石井のところに飛んで行った。

楠木は、大河内が言ったことを、熊野からあらかた聞かされていた。あの手紙は仮想のものだったということ。でも、楠木は直接本人に聞かないことには納得がいかなかった。あれだけの文面を、架空のことで書けはしないと自分なりに決めつけていた。まして、あいという女性を、自分で理想像に作り上げてしまっているの、どうしても打ち消すことができないでいた。

楠木は、恐る恐る吉井の後から取調室に入った。

大河内が楠木を見て、表情も変えず、黙って顔を上げた。

「大河内だ」

吉井が楠木に言った。

楠木は、大河内のやつれた顔を見た。聞きたいことが山ほどあったのだが、その顔を見て、唾と一緒に飲み込んでしまった。

「もういいです」

楠木が、吉井にそつと言った。

「仮想の女神は、仕舞っておきます」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0854j/>

仮想の女神

2011年3月9日06時53分発行